

病室の早川さんを最後に
見舞ったのは三日、月曜日
の昼ごろ。休養のペースを
もしかしたら乱すのではと
心配しながら妻と二人でう
かがった。早川さんは良好
な状態ではなさそうだった
が、口は元気で大学や研究
の将来を気遣い、「来週予定
されている会議に出席し采
配をみるつもり」などと話
していた。

肉体的には無理かなと思
ったが、氣力の強さでは誰
よりも勝っている早川さん
のことだから予定通りのこ
とをされるだろうとの望み
を伝えて退室した。妻は早
川夫人と専責を共にしたら
しく、夕刻に夫人からの電
話で「病室へ戻るのが遅
い」と大声で叱られたと言
っておられた。早川さんは
まだまだ大丈夫と安心し
た。

だから六日早朝、早川さ
ん急逝の報を受けて驚い
た。しばし心臓が止まる思
いであった。あの旺盛な氣
力でも病にむしばまれた肉
体を元に戻すことができ
ず、現在の医学の先端をも
つてしても生命を維持し得

なかつたとは……。この無
妄は、昨日までの早川さん
の言動からは想像もできな
かった。

早川さんに私が出会った
のは、昭和二十三年ころで
ある。私は大阪大学理学部
物理学教室で渡瀬謙先生を
中心に進められていた宇宙
線研究の一員であった。そ
のころは、特に昭和二十四
年十一月に湯川先生がノー
ベル賞を受賞された後で、
素粒子研究、宇宙線研究を

目指して盛んに研究会を行
っていた。当時、早川さん
は新進気鋭の若手研究者の
中でもひととき目立ってい
た。強烈な指導力のある論
理と回転の速い頭脳で研究
目標の指南をされる発言が
多かった。

口の悪い大阪人中心の宇
宙線研究者集団はまた三千
歳にもならぬ早川さんを
「早川老」「早川大老」と
ほかに原子核理論とその早
んに講われ(拾われ)て実

は高エネルギー原子核物理
学。
ふくい・しゅつじ 一九
二三年、大阪市生まれ。大
阪大学理学部卒業。六二年
から八七年まで名大理学部
教授。名大名誉教授。専門
は高エネルギー原子核物理
学。

常に必要な存在だった

早川幸男先生を悼む

福井 崇時



日本学士院賞が決まり、インタ
ビューに応じる早川幸男名大
長＝東京都内で昨年3月写す

呼んで、時にはその指南に
従い、時には反対も唱えて
いた。米國での研究を終え
て帰國後の早川さんはその
大老かりをますます發揮さ
れた。今ふり返って、その
時、早川さんの指南に従っ
て研究を実施していれば今
は……というテーマのなん
と多いことか。

川崎延長である宇宙創生と
構造についての研究にも力
を發揮され、広い分野の多
くの研究者から尊敬される
大老であった。

私たちの住居が同じ北千
種の公務員合宿舎だった
ことろ双方の長男が同じ年
齢で、さらに早川夫人の友
い実験講座が開設されるこ
とになり、早川さんが京都
大の基礎物理学研究所から
名大へ来られ、私は早川さ
みのお付き合いが始まっ

験を担当する者として、ほ
んど同時に赴任した。早
川さんは、プラズマ研究所
や高エネルギー物理学研究
所の創設準備の中心人物の
一人として学問と学内政治
の両面に手腕をふるわれ
た。私は早川さんの活躍に
ただただ感心するばかり
で、横から助けることの少
なさを嘆いていた。

もあの早川さんのお声が聞
こえてくるようである。

「目撃者」ということ
を実際に感じるのもう少
し時間が経つてからだろう
し「早川さんがいらっしや
ったらなあ……」という場
面がやがて多く出てくるで
あろう。常に必要な存在で
あったのだから、もっと目
分を大切にしていほしかっ
た。(福山女学院大学入園
関係学部長)